

令和元年年度中間市総合教育会議会議録

- 1 日 時 令和元年11月12日(火) 午前10時
- 2 場 所 中間市役所本館 第1教育委員会室
- 3 出席者 市長 福田健次
教育長 片平慎一
教育委員 河本直子、衛藤修身、佐野正靖、太田かおり
- 4 欠席者 なし
- 5 事務局 教育部長 佐伯道雄
学校教育課長 松永嘉伸
学校指導課長 小野篤志
教育施設課長 北原鉄也
生涯学習課長 米満孝智
学校指導課課長補佐 高橋啓之
生涯学習課課長補佐 友廣慎也
学校教育課総務係長 山本朝教
- 6 傍聴人 4人
- 7 議事日程 別紙のとおり
- 8 議事次第 別紙のとおり

中間市総合教育会議議事日程

令和元年11月12日（火）10時00分

- 1 開会
- 2 市長あいさつ
- 3 出席者紹介
- 4 議事
（1）中間市の特色ある教育について
- 5 閉会

[開会時刻：10時00分]

- | | |
|--------|--|
| 佐伯教育部長 | <p>みなさんおはようございます。ただいまから令和元年度中間市総合教育会議を開催いたします。私は教育部長の佐伯でございます。本日はよろしくお願いいいたします。</p> <p>それでは次第に沿って進めさせていただきます。初めに福田市長よりごあいさつをお願いいたします。</p> |
| 福田市長 | <p>みなさん、おはようございます。本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。令和元年度中間総合教育会議にあたり、一言ご挨拶申し上げます。教育委員の皆様におかれましては、日頃から中間市の教育の充実、発展にご尽力をいただいておりますことに、深く感謝申し上げます。</p> <p>さて、現在の地方自治体を取り巻く状況は、中間市のみならず、少子高齢化の進展や人口減少に伴う税収の減少、社会保障関連費の増大、インフラや公共施設の老朽化など多くの課題が山積しており、中間市にとっても難しい局面となっております。このような状況のもと、私は中間市の子もたちの健全な育成と学力の向上を願い、教育に力を注いでいくつもりでございます。</p> <p>本日のテーマは「中間市の特色ある教育」ということで、今後の学校教育などを考える上で非常に重要なテーマでございます。是非ともこの会議で、教育政策の方向性を共有していきたいと思っておりますので、活発な議論を賜りますようお願い申し上げます。私のあいさつとさせていただきます。本日はどうぞ、よろしくお願いいいたします。</p> |
| 佐伯教育部長 | <p>ありがとうございました。ここで教育委員のみなさんに自己紹介をお願いいたします。それでは片平教育長から順をお願いいたします。</p> |
| 片平教育長 | <p>教育長の片平でございます。どうぞよろしくお願いいいたします。</p> |
| 河本教育委員 | <p>教育委員の河本でございます。どうぞよろしくお願いいいたします。</p> |
| 衛藤教育委員 | <p>教育委員6年目の衛藤と言います。どうぞよろしくお願いいいたします。</p> |
| 佐野教育委員 | <p>教育委員の佐野と申します。今年1月から拝命させていただいております。どうぞよろしくお願いいいたします。</p> |

| | |
|----------------|---|
| 太田教育委員 | 教育委員の太田でございます。今年6月から拝命しております。よろしくお願いいたします。 |
| 佐伯教育部長 | ありがとうございました。これより議事に入らせていただきます。議事は中間市総合教育会議設置要綱第4条第1項の規定により、福田市長に進めていただくことになっております。福田市長よろしくお願いいたします。 |
| 福田市長 | それでは次第にそって議事を進めさせていただきます。(1) 中間市の特色ある教育について説明をお願いいたします。 |
| 片平教育長 | 中間市の特色ある教育についてでございますが、中間市の学校教育につきましては、大きな課題があります。そのひとつが学力向上、豊かな心の育成でありまして、各学校様々な取り組みやっているところでございます。学力向上につきましては、小学校は小学校のゴールを目指して、また中学校は中学校のゴールを目指して取り組んでいきましたが、中間市としてこのゴールが、小学校でのゴールと中学校のゴールが違うんじゃないかと思ひまして。中学校は高校入試等をゴールとしていますし、小学校はそういったところは薄いんじゃないかというところを踏まえまして、小学校と中学校のゴールを一緒にしようじゃないかと考えました。9年間で子どもたちを育てていこうということで、校区連携学力アップ推進事業というのを平成26年から取り組んでまいりました。これが福岡県でも非常に特色のある取り組みでございまして、毎年バージョンアップしながら進めております。その取組を中心として、本日は学校指導課から、成果と合わせながら説明をしていきたいと思ひます。 |
| 高橋学校指導 課長補佐 | 中間市の特色ある教育について説明させていただきます。平成30年度のもので成果まで出ておりますので、こちらの方で説明をさせていただきます。中間市小中連携学力アップ推進協議会というものが平成24年度から第1期の3年間、そして27年度から第2期の3年間を設定しました。第3期の3年間が昨年度から始まっております。3学期は4つの中学校区の見直しをしまして、中間中学校区、東中学校区、北中学校区、南中学校区と4中学校区での取組を進めているところです。 3ページ、平成30年度、第3期の1年次の中間市の重点取組項目を①連携13の視点、②家庭学習教科期間等の実施、③県立高校入試問題の活用となっております。 4ページをご覧ください。各中学校区における具体的な取組になります。 |

授業づくり、学習の基盤づくりの2点につきまして、各中学校区で中間市の重点取組を受けて取組を実施しております。授業の改善、家庭学習を中心とした学習の基盤づくり、そして中学校におきましては県立校高校の入試問題を活用したテスト等につなげているということです。

次の5ページから8ページに、昨年度4つの中学校が取り組みました重点取組、取組評価等を載せています。

平成30年度4つの重点項目ですが、これは福岡県の平成30年度末に出された重点項目とも重なるものです。1つ目は小中合同研修会の位置付け、2つ目は小学校における「県学力調査中学1年生の指標」の設定、3つ目は「『書くこと』を重視した授業づくり」を義務教育9年間を通して徹底する。4つ目は「非認知的能力」の育成に係る取組や指標の位置づけ、です。これらを取り入れて、令和元年度の取組がスタートしました。この4項目は、すでに中間市が中間市小中連携学力アップ推進協議会を通して取り組んできたことであります。小中合同の研修会も位置づけて各中学校で実施しております。また、県の学力調査「中学校1年生の指標」ですが、中間市の学力調査が大変この指標に役立っています。4点目の「非認知的能力」の育成に係る取組や指標の位置付けということで、これにつきましては学級集団アセスメント調査です。ハイパーQ Uを使って、児童生徒のいじめの早期発見や学習意欲等の個々の課題を教育相談等にかかしています。11月中には本年度2回目を実施されます。「書くこと」につきましては、先日中間小学校で研究発表会があり「書くこと」を中心とした授業公開がなされました。これらの項目について、中間市はこれまで取組を進めているところです。そして、先ほどの4中学校区を取組をここに載せております。次に、全国学力調査についてです。昨年度のこの時期の校長会議、教頭会議、教務主任会議の中で、教育長を中心に本年度の全国学力状況調査に向けての短期的な取組を実施することを達示、指示しました。そして、各学校より全国学力状況調査に向けての取組や、その成果について計画報告書を提出してもらい、取組を進めました。また、指導主事3名が各学校を回ることで、指導助言を行いました。これらの取組によって、平成31年度の全国学力・学習状況調査の結果につながっていきました。短期的には本当に各学校が真剣に取り組んでいただいたと思っています。その結果については元嶋指導主事から説明いたします。

元嶋学校指導
課係長

9ページをご覧ください。本年度の全国学力・学習状況調査の結果をのせております。1番、小学校6年生の平均正答率は国語、算数ともに全国平均を上回っています。今年度は国語、算数どちらの教科もほとんどの問題

で全国平均正答率を上回るなど、学力の向上が見られます。また、昨年度、この子たちが5年生の時に受けた学力調査からも飛躍的に向上しています。一方、国語では「読む能力」、算数では「数学的な考え方」「数量や図形についての技能」に若干の課題が見られます。今年度、全国の正答率を下回るなどの課題が見られた問題は以下のとおりです。10%程度正答率が下回った問題のみを示させていただきます。

2番、中学校3年生の正答率については、全教科において全国平均を下回っております。しかし、数学では、昨年度中学2年生の時から学力が向上しています。また、国語では「書く能力」「言語についての知識・理解・技能」、数学では「数学的な技能」「数量や図形などについての知識・理解」、英語では「言語や文化についての知識・理解」に特に課題が見られます。具体的に、全国の正答率を下回る問題は以下のとおりです。国語の書く能力は小学校からの課題が引き継がれてるところがあり、小中連携で書くことに力を入れているというのは、ここの課題改善にもつながっていくと考えております。

10ページに質問紙からみえる課題と対策をのせております。ここで示しているのは、1日平均あたりの読書時間と新聞を読む時間についての調査結果になっております。読書時間については、小学校6年生において「2時間以上」が全国より2.1%少なく、「全くしない」が48.4%と全生徒の半数ほどとなっています。「新聞を読むか」については、小学校6年生において「ほぼ毎日読んでいる」児童が全国より5.3%少なく、「ほとんど、又は全く読まない」児童が14.6%多くなっています。同様の傾向は中学3年生にもみられ、「ほとんど、又は全く読まない」生徒は全体の85.9%に達しています。読書によって、論理的に思考する力や想像力を育み、“ごい”を豊かにするといった良さがあると考えております。また読書の内容によっては、心を豊かにするという学校教育の目標にも大きくかかわってくると思いますので、これから推奨して参りたいと思っております。

最後に、11ページに今後の取組を示しております。A「教育環境の整備と拡充」ということで、少人数指導のための教員配置、食習慣の涵養のための給食の提供。それからB「小中連携学力アップ推進事業の充実」で義務教育9年間のゴールを目指した連続性のある授業改善。それと学級集団、人間関係づくり、ハイパーQ.Uを使った取組。ドリカムノートの継続的な実施、質の向上です。

C「研究指定委嘱校及び校内研修への支援の充実」、校内研修を各学校で行っております。これについて指導主事が指導助言等を行っております。

教科の教育振興会とのタイアップも進めてまいります。それから最新の教育情報等の提供を今後もしてまいります。

D「各種教員研修会の充実」ということで、本市主催の研修会を外部講師の招聘も含めて充実させてまいります。それから、福岡県及び北九州教育事務所主催研修への積極的な参加を奨励してまいります。

最後に調査問題分析資料の活用促進ということで、来週行われます小中連携学力アップ推進協議会でも、調査問題を活用した授業改善のための資料を示して活用促進をしていきたいと考えております。

小学校ではこの勢いをさらにつけていくべく、中学校においても「あと1問が解ける力を」と考えております。小学校では「さらに1問」、中学校では「あと1問」が解ける力をこれからもつけて、9年間のゴールにむけて、子どもたちを育てていきたいと考えております。

高橋学校指導
課長補佐

9ページになりますが、小学校6年生、中学校3年生の全国学力・学習状況調査の結果です。先ほども申しました取組によりまして、短期的な取組として6年生におきましては、初めて、国語科も算数科も全国及び福岡県の平均を超えている結果です。中学校3年生におきましても、徐々に全国及び福岡県に近づいてきているところです

福田市長

ありがとうございました。ただいま学校の特色ある教育につきまして、学校指導課より説明がございました。私から意見を述べさせていただきます。

非常に結果がでてきているということに対しては驚きと同時に、みなさまの努力、やっている行動が正しかった、実を結んでいるということ。子どもたちのために本当がんばってくれているということに、非常に感謝申し上げます。ありがとうございます。時間をかけながらやっていけば、今の小学校6年生が中学校に上がっていくわけですから、良い流をつくれればいいなと思っていることと、小学校で「文と文の意味のつながりを考えながら、接続語を使って」と、これなんです。標準語を使ったことがないですから、例えば博多だったら「だけんね」とか方言があるじゃないですか。家庭でそういう言葉が身につけているから、国語的に「しかし」とか「でも」とか使ったことがないんですね。その彼らに国語的なテストを解かそうとしても難しいなというのがあります。ですから、僕は情報がいろいろ入ってくる社会においては標準語というのはどうなんでしょうね。我々少しリスクがあるんですよ。僕も初めて石川県という田舎から東京に出たときに何を言っているのか分からなかったというのがあって。テストの問題

は全て標準語ですよ。普段使ったことがないんですよ。ですから何が美しい日本語なのか、何が美しくないか分からないから、本を読んでも分からないんですよ。これをいかに子どもたちに興味あるように、本を読む習慣をつけさせて、そして本の中でこれが美しい日本語なんだよと。田舎の言葉は美しくないのか、そうじゃなくて。学力というのはテストですから。子どもたちに何かひとつ標準語というか、強制しないで楽しく、クイズを解くような感じですよ。問題っていうから嫌なものになってね。「なぜぞだよ」と言うと結構喜ぶような、そういうくらいが小学校の子はいんじゃないかなと思います。親としての言葉しか言えませんが、こうやって学力が向上してるということは、みなさんのやっていることが正しいということ。結果がでていうことを、私は感謝を申し上げます。さて、それでは教育委員の皆さま、何かご意見ございませんか。

衛藤教育委員

それでは小中の学力アップにつきましては、毎月の教育委員会の折に学校指導課の方から、いろんなことをやっているんだということをお聞きしますので、そういう面ですごいなと思いながら楽しみをもちながら話を聞いているんですが、全校を通してお尋ねしたいことは、学校の教育計画を実行するたびに、PDCAサイクルが大事だという話をされています。私もそうだと思いますが、今話をされた部分で私が感じた部分はPDAは入っているけど、Cが分からないと。どう検証しているかというのが分からないので、これの検証をどうされているのかお尋ねしたい。というのは、結果でもって検証するという部分があると思いますが、中間市は年2回テストをされていますので、そういうテストのときに検証されている部分は分かりますが、一番大事なことは、子どもが本当に分かっているか、あるいは、何が分からないのか、ということを毎日どう検証するのかと、そのことの積み重ねが、結果的に学力の向上につながるのではないかと私は考えています。日々の検証をどうされているかというのがこの資料の中から見えてこないということで、Cの部分について内容をお聞かせいただけたらというのが1点目です。

2点目は、保護者の協力を得るためにドリカムノートの作成をされて、中間市がそれを推進されているということで、非常に効果が上がっているし、子どもたちも有効に活用しているというのが、学校訪問をしているときに分かりました。これから先は何が大事かなといったら、どれだけ保護者を巻き込むかと、この協力をさらに推進するために、ドリカムノートのサポートをためらったり、あきらめている保護者をどう巻き込むかというのは、学校の問題でありながら、教育委員会の課題でもあるだろうと思う

んです。そのことについて、まず最初にドリカムノートが子どもの学力に非常に大きな関係をしてますよということを、保護者に周知徹底させることが一番だろうと思います。ところが、現実には学力の遅れている子ども、あるいは学力が結果的に遅れてしまった子どもや、教育に関心を持ちたくても生活の関係で関心をもてない親たちに対して、ドリカムノートで「協力して下さい」「親の力をかしてください」と働きかけていくことによって、もっと家庭学習が向上するだろうと思いますが、そのところを学校を含めて、どうしているのかというのが2点目です。

最後に、それぞれの学校に学力向上プランというのがありますよね。その内容と小中連携学力アップ事業との関連はどうなるのかというのが3点目です。以上です。

福田市長

学校指導課の説明をお願いします。

高橋学校指導
課長補佐

日常的な取組として、小中連携学力アップ推進協議会には、各中学校区で「連携13の視点」というものがございます。これが日々の授業の授業改善に関わるものです。例えば「課題意識を喚起するための工夫がなされているか」、「めあてを提示し、学習内容や方法について分かりやすく説明しているか」など、教師自身が自らの授業を振り返ることができるようなことです。そして授業公開をする際には当然これを使って授業公開を行うことで、日々の意識化を図っているところです。

2点目。保護者へのドリカムノートの啓発につきましては、4月、クラスが始まる段階で、学校通信、学年、学級通信で紹介をしています。そして、各学級でノートを掲示するなどして、子ども同士が見あったり、評価しあったりしています。また、PTAと連携した家庭学習強化期間の中で、「宿題ができた」「今日はこうことができた」などのチェックリストを作って、家庭から得られた良い評価を無記名で紹介したりする活動をしています。そして、子ども自身に自覚を持たせていくというのが、中学校につながる大切なところであると考えております。

小野学校指導
課長

ドリカムノートについては、小中連携の取組で実際に中学校の生徒が使っているドリカムノートを、小学校に持ち込んで、実際に子どもたちが中学校での勉強のやり方であったり、小学生が中学校での心配ごと等、子ども同士が交流するという取組を行っております。

| | |
|----------------|--|
| 高橋学校指導 課長補佐 | 3点目ですが、学力向上プランの作成ですが、これは県教育委員会からでているもので、北九州教育事務所からは、これをさらに具体化した学力向上重点取組というものがございます。PDCA検証改善サイクルによるロードマップによって学力向上の重点取組を進めていきます。 |
| 元嶋学校指導 課係長 | <p>2点目のドリカムノートについてですが、家庭を巻き込むというのが大きなテーマになってくると思います。校区によっては保護者のコメント欄を設けたり、場合によっては印鑑だけでもいただいたりするなど学習内容のチェックと応援、励ましをしてもらおうという動きをしているところもありますし、ノート自体のモデルチェンジも今後は検討していきたいと考えております。</p> <p>それから3点目の、学力向上プランと一致してるのかどうかということですが、学力向上プランは先ほど申し上げました重点取組、小中連携の取組を一致させております。重点取組に示される取組指標として学校長が巡回し、めあてが具体的に示されているとか、常時確認することを示している学校もあります。学力調査の取組の中で、そのようなかたちでPDCAの日常的なサイクル回しもしているという状況です。</p> |
| 衛藤教育委員 | <p>2点目のドリカムノートについては、工夫をされていることはよく分かっているし、保護者にも動きが広がってきて浸透してきているのは分かるんですが、学力向上の中に一番大事なことは、学力がいろんな状況の中で遅れてしまった子どもたちが1点でも上げれば、結果的に学力は向上するだろうと。そのためには、その子どもは勿論のこと、保護者も巻き込んでいくしか方法はないだろうと。そこが今一番難しい部分だろうと思うんです。それを具現していこうということで、こういう事業が組み立てられていると思うんです。例えば、中学生は学校からだしたプリントはみせない。かばんの中に仕舞って保護者に出し忘れて「忘れられた頃にプリントがあった」ということを、よく子どもから聞きますよね。小学生はほとんどみせますが、中学校にはいったら学校からでたプリントやお知らせとかは見せない子どもが結構いるんですよね。そうするとその子どもたちのプリントが届かない限り学校での取組が、教育委員会との間で進めている学校の取組が、親に伝わってないという部分があると思うんです。そうすると、ドリカムノートに親の印鑑をもらうときも、親が「押しておいてね」ということで、適当に印鑑を押させるということもあるから、「それではだめですよと、もう少し子どものことだから、子どもの将来に関わることでですから目を向けてください」と思うんですよね。それが今一番大事なところだろ</p> |

うと思います。そのことが結果的には1点が上がるということに繋がるんだらうと思います。

それともうひとつ、3点目の学力向上プランというのは、先生方の負担がかなり大きくなると思います。一方では働き方改革しながら、一方では負担過重になるというのは気になるなと思って、その関係はどうなっているかとお尋ねしたわけです。

福田市長 貴重なご意見ありがとうございます。今のことに対してご意見はありませんか。

片平教育長 ドリカムノートについてですが、このドリカムノートというものは、家庭学習、学習習慣の定着を狙って作られたものです。機能的には一つが毎時間の授業の振り返りができるように、「学習の目当て」「内容」「まとめ」が記入できるようになっています。また、理解度を自己評価できるようになっています。さらには、理解の度合いにあわせた自己学習が隣のページを使ってできるようになっています。家庭での自主学習では、自己評価をもとに、あと少しでわかるところにターゲットをあてて学習するように指導しているところです。主体的な家庭学習が定着すること、習慣化することで学力の定着が図られると考えています。ドリカムノートを活用して子どもの学習への主体性、自ら学習へ向かう姿勢を期待しています。このことを踏まえて、家庭の協力がいただければ、更に学力の向上が望めると考えます。

衛藤教育委員 実はこの学力アップ推進事業が校区によって、校区全体で会議をしたり、推進委員会で会議をしたり、校区によっては合同でという様々なスタイルがありますよね。それは各校区の独自性だから私はいいと思うんですが、この会合があるときに教育委員会の教育指導課は参加されているのか、されていないのか。もし参加されているとしたら、どのような場での支援や協力をされているのか、教えていただきたいというのが1点です。

もうひとつお尋ねしたいのが、学力検査でいつも疑問に思っているのが、質問紙の調査です。「新聞を読んでいません」という人と「新聞を読まない人」と「学校以外に本を読まない人」の割合がほぼ一緒なんですよ。ということは、子どもたちの文字離れということを言われてずいぶん時が経過していますが、この状況が残ってると思うんですよね。特に新聞については、今の保護者はスマホで全部新聞の役割できるから、新聞を購読されてない保護者もかなりおられるんじゃないかと思うんですよね。そうす

ると、子どもたちは新聞を読む機会がない。新聞そのものがどういう内容になっているか知らない子どももいるかもしれないという状況の中で、「新聞を読んでいますか」という問いをしたときに、答えられない子どもがいるのではないかと。新聞を読んでない子どもたちに新聞のことを聞いても難しいのではないかと思うんですけど。そこら辺はどう考えたらいいですかね。中間市の場合は9千世帯位しか新聞をとってないと聞いたことがあるんですが、そうなるちょっと酷なような気がするんですが。そのことはどう考えたらいいですか。

小野学校指導
課長

これは全国学力学習状況調査なので、新聞についての質問項目が出てきても仕方がないところです。ただ、新聞を購入してない家庭というのは全国的にも増えてきているのかなというところもありますし、中間市の場合には読書については各学校で朝読の活動であったり、小学校では読書の時間というのが週に1回あったりし、本に触れさせるという機会は学校教育の中でも行なわれてるという状況です。そのような活動から子どもたちにとって読書や読むことに興味関心が広がっていけば、という思いがあります。また、図書館の取組でも小学校は積極的に、読書コンクールや調べる学習なども行われておりますので、そういった中で本に触れさせる機会というのは、学校教育の中でも積極的に行っていると思います。

衛藤教育委員

要は文字離れの状態が残っているということ。それで書くことに対して、県の教育委員会が重点的に取り組んでいることについては、文字離れをなくすということで、中間市もそれを受けているわけで、文字離れの問題というのは日常的にどれだけ文字に触れるかということ抜きにしては考えられないと思うんですよね。そうすると、新聞を読むとか、本を読むとかいうことで、小学校では読み聞かせをしたり、中学校になると朝読とかの取組をされていますが、子どもの自主性に任せている部分があるのではないかと思います。だから朝読のやり方を今後検討していくということは必要かなと思います。そして読書によって子どもがよい影響を受け感性を磨いてやるということが大事かなと思いますので、今後朝読の問題について教育委員会で考えていただければ、中学生の読書についても違った結果が得られるのではないかと意見を意見としてお願いしておきたいと思えます。

福田市長

ありがとうございました。他にはございませんか。河本教育委員。

| | |
|----------|--|
| 河本教育委員 | <p>表でみると簡単なことのように思いますが、これだけ短期間で中間市の学力を上げるのは、本当に教育委員会も先生も血のにじむような努力の結果だと思っております。そういった中で読書ができてないというのはやはり、これだけ朝読の時間をとって工夫しているのにできてないというのはとても残念な気がしますけど、どうやって子どもたちに読書をさせていけばいいのかということと、やはり国語の大切さというのを聞いたことがあります。子どもの学力が伸びるかどうかというのを見るのは、まず国語の学力を見ることからだと。国語の学力がいい子は必ず成績を上げられる伸びしろを持っていると聞いたことがあります。せっきゃくここまで学力を上げたんですから、維持していくためにも、読書の必要性、国語力をつけるということが大事だと思うんです。以前中間市のある中学校の校長先生が俳句に力を入れておまして、その校長先生自体が俳句に詳しい方だったので、その学校は1年間で学力が伸びたんです。そういうこともあるから、読書にこだわらなくても、国語力を伸ばすことに力を入れていただきたいと思います。私の考えとしては、例えば子どもたちを図書館に連れて行って静かに本を読ませるとか、そういう時間を作れないかなと思うんです。もし授業時数に差支えなければ図書館に行けば本がたくさんあります。簡単な本でも興味のある本というのは必ずでてくる気がするんですよね。そして、公衆の中で静かにするというのも同時に学べるから、そういうことがいいのかなと思っております。これからは国語力を大切にしていきたいと思っております。</p> |
| 福田市長 | <p>その他にご意見はありませんか。</p> |
| 衛藤教育委員 | <p>中間市だけの問題ではありませんが、若い先生が増えて、ベテランの先生が少なくなっているという状況で二極化してますよね。若い先生たちの指導力の向上が、学力向上のキーポイントになるだろうと思うんですが、若い先生たちの指導力の向上と、ベテランの先生との指導力の差をどう埋めているのか教えていただきたいと思っております。</p> |
| 小野学校指導課長 | <p>ここ数年小学校に若い新任の先生がたくさん採用されています。中間市内の若年の先生方というのは研修意欲というのがものすごく高いです。積極的に自分の指導力を高めていこうという思いがあって、前向きな先生が全体的に多いと感じています。ベテランの先生と若年の先生がうまくかみ合い、若年の先生方の悩み事などをベテランの先生方に相談するなど、校内でもそういうかたちができています。これからは若い先生方が教育経験を</p> |

積み重ねていって、力をつけていってくれるのではないかなと思っています。県全体としても若年の先生が増えてきているところでありまして、県の事業でもサポート研修で支援にあたっています。きちんとした指導案ではなくて、簡単なめあてとねらい、授業のサポートを県の指導主事を招聘して、1時間授業の指導助言をいただいたり、また市教育委員会でも初任者研修、道徳研修、教科の授業などを指導助言したり随時行っております。

衛藤教育委員 来年度は小学校教員採用の倍率が1.4倍ということは、2人受けたら必ず1人は通ると考えていいと思うんですが、これからますます若い先生をどう育てていくかということは重要な課題だと思いますので、教育委員会のお話を聞きまして安心しましたけど、あと2,3年は、それが続くという話も聞きますので、その辺につきましては、我々も協力をしていきたいと思っていますので、よろしくお願ひしたいと思っています。

福田市長 佐野委員どうぞ

佐野教育委員 先ほどから国語力だったり、書くことの重要性というところを非常に重視されているところでございます。うちの子どもも小学校6年生で、作文を読みますと、口語文、はなし言葉で文章を書いている場合が多くて、書くときは違う書き方をしないといけないという区別がついていないところがあるので、そういったところは読書力、読む力が少なく、口語体になってるんだろうと思っていますところ。長期間にわたって書くことの重要性と、学力アップを推進していただきたいなと感じているところがございます。

あとは、何人かの希望者があったといういことで、数学検定を受講する学校がありましたが、今、数学検定や英語検定、漢字検定、いろいろな検定があります。そういのを積極的に生徒に受講させるということも、ある程度の目標に向かっていろんな学習をするという目安を、自分の中で作りやすいことになるのではないかなと思っていますので、そういったところも、検討していただければと思っています。以上です。

福田市長 ありがとうございます。それでは太田委員さん。

太田教育委員 はい、私からは2点でございます。1点目は、今回小学校6年生の学力が全国平均を上回ったということで、素晴らしい指導のたまもの、児童の努力のたまものだと思うんです。ひとつここで気になるのが、短期的取組の

成果を、いかに長期的な持続的な学力につなげていくかということが、非常に重要だと思っております。ここで伸びた成果を、この子たちが中1、中2、中3と進学していく中で、決して下がることのないように、伸び続けるようにどう指導していくかということの対策が今後必要なのではないかと考えております。その指導の成果をみていくという意味では、定期的に指導の成果と、子どもたちの学力の推移をみていく必要があると考えています。報告書を拝見しますと、平成19年から30年度までの学力調査の推移がでていると書かれております。ぜひ拝見してみたいなと思っております。同じ学年がどう伸びているかという推移をみて、万が一落ちた場合は、どういう原因があるかといところを分析して、そこに対策を講じていくということが非常に重要だと思います。

それから、学年を横断的に追っていくのと、学年間を比較しながら、どう異なっているのか。どうしてこの学年がいいのか、悪いのかというのを分析していく必要があるのかなと考えております。

ひとつ気になりましたのが、学力調査を昨年度までは2回されていたところが、1回になったと言っていたところが気になっておまして、どの時期に実施するかにもよると思うんですが、学力調査を効果的に、特に中学校段階は、ある程度定期的に見ながらチェックしていく必要があるかと思っております。そういった意味で、子どもたちの学力と指導の成果というのをどのようにするのか、今後、チェックを年1回で本当にそれでいいのか、というところが気になりました。

それからハイパーQ Uというアンケートが年2回実施されているということでしたので、これが年2回必要であるのかどうか。むしろ学力調査の方が大事なのかなと思っておりますが、いじめのアンケートであれば、こういった調査は学校独自でも取り組める部分もあるのではないかなと思うのと、人間関係や集団の調査が短期的に入れ替わるのは、学校で観察によって把握して、こういった調査アンケートでは年1回程度でもよろしいのではないかなと思ったところでございます。

2点目ですが、教育委員のみなさまおっしゃっているように、家庭学習の習慣形成というのは非常に重要でして、学校でできることというのは限られておまして、家庭でできることも非常に多いんですね。そういった意味で保護者を巻き込んでというのは、非常に重要なことだと思います。家庭学習の強化期間といのがあるということで、非常に成果を上げているようですので、これを持続的につなげていくことが重要なかなと思っております。小学校で学習習慣がついていないお子さんは、なかなか中高、大学に行っても非常に学力や学習習慣に影響がでているんですね。ですので、早い

小学校の段階で、外で遊ぶこともしてほしいんですが、少なくとも1日のうち短い時間でもいいので、机につく習慣を家庭でつけていただくことが必要だと思います。そういった意味で保護者会などを使って中間市の方針であったり学校の取組を保護者の方に十分理解していただく必要があるのかなと思いました。以上です。

福田市長

ありがとうございました。ほかに何かございませんか。

小野学校指導
課長

学力向上のためには学級がしっかりしていないと、学力は教師の指導力だけでは難しいところがあって、そういったことが大事な部分だと考えております。そして、学級の中の人間関係というのは、小学校の場合は担任1人ですし、中学校の方でも教科担任が入れ替わり立ち代りで、先生たちが子どもたちの人間関係をみていても、どうしても一面的な部分でしかないので、そういったところを客観的なハイパーQ Uというアンケートで担任が気づかない人間関係というのが分かることができます。そういった意味で、1回目は6月上旬に新しい人間関係がある程度形成された段階で実施します。そして、11月下旬から12月上旬に2回目を実施します。半年の中で学校生活、学級の中での生活で、そういった中で、子どもたちは年度当初の人間関係と、半年以上過ぎた中での人間関係というのが変わっていきたりします。そういったところでは、2回行うというのは非常にいい効果があると考えています。

学力調査については、市で行っている調査は年1回なんですけど、中学校では随時診断テストを実施しております。学力学習状況調査や、県の学力調査、市の学力調査以外でも学校では随時定期的に行っております。

太田教育委員

ありがとうございます。

福田市長

他にはございませんね。それではその他にうつりたいと思います。何か。

衛藤教育委員

市長さんがおみえになっていますので、予算が伴うことで、いつも気になっていることをひとつだけお願い申し上げたいのですが、予算が非常に厳しい状況は存じ上げておりますので、どこかで検討いただければありがたいという内容です。校舎の外壁が汚れているんですよ。それで、高圧洗浄機で水洗すればだいぶ違うと思うんですが。かなりの予算が伴うことだろうと思うんですが、今後の学校をどう維持、保存するかという検討もございまして、今すぐ全部の学校と言えないと思いますが、来年度の研究

指定校の北小と北中もかなり外壁が汚れています。高圧洗浄機か何かをかけていただければ、ずいぶん違うと思いますので、予算をなんとか検討いただければと、無理なご相談と思いますがお願いしておきたいと思います。

福田市長

貴重なご意見ありがとうございます。
他にありませんか。

太田教育委員

今後の取組のところで、教育環境の整備と充実のことを書いておりましたが、ぜひイギリスのブレア首相が、1に教育、2に教育、3に教育と言ったように、私も人間形成の上で教育がすごく大事だということを感じております。それで、教育に充てる予算ということだと、教育環境の充実というのは、非常に重要だと思っております。例えば今後小学校の英語教育が3、4年生にも入ってまいります、ALTの配置であったり、最近では教材が他教科も含めて非常にIT化して、たくさんの映像や音楽を使いながら学べる教材が出されてきております。ITを使った環境で、子どもたちが学んでいけるような予算をぜひお願いできないかなと思っております。よろしく願いいたします。以上です。

河本教育委員

これも少し予算に関わることで、非常に申し訳ないんですが、市長さんにお伝えするしかないの、市民の声のひとつとして、聞いていただきたい。私は音楽が好きで、中間東中学校の吹奏楽も聴きに行くんですが、中間市は学力以外にもそういうことにも取り組んでおりまして、以前、東中の吹奏楽は大変有名で、県外で「中間市からきました」と言うと、「東中学校のある中間市か」と言われるくらい知れ渡っていたんですね。そういうことを大切にしていきたいんですが、今年は南中学校がマーチングで九州大会に出場しましたが、保護者や先生方から「楽器が古くなって、とても困っている」と言われておりました。そして「買える子は家庭で買って使ってるけど、本当は困っているんです。なんとかならないのでしょうか。」と言われるんです。大変かと思いますが、例えばホームページを通して寄付のお願いをしたりして、こういうことに対して何か方法はないものか考えていただきたいと思います。

福田市長

はい、よく分かりました。いずれにしろ議会の議員さんと一緒になって、街づくりのために、必要不可欠な予算を理解していただいているし、これから未来志向の街づくりのためにどういうものが必要なのかということ

も検討しながら、さらに研究して参ります。今言われたことというのは非常に大事なことで、何か方法はないかということで、ないわけではないんです。やるかやらないかと思っていますので、僕はどちらかというやるほうですので、やっていく方に必ずなんとか近づけるようにしていきたいと思っています。昨日、中間高校の生徒たちが来て、少人数のプラスバンドが全国大会に出場するという嬉しい話を聞いたり、スポーツでいうと女子の棒高跳びで初の4mを超えたという、いずれ日本一になるんじゃないかという生徒がいたり、そういう子どもの芽をつんではいけない。そのためにはどうしたらいいかと考えています。市が「ONE TEAM」になって、どうしたらいいかという思い合いの心を持ってくれば、教育につながって、いい方向に向いていくんじゃないかなと思います。みなさんいい意見、間違えひとつもないと思っていますし、これが街づくりの核となっていくんじゃないかなと嬉しく思っています。新聞読まない話がありましたが、今の子どもたちの方がきっと文字に触れてますよ。スマホでいっぱい文字をみてるんですから。ただ、書けないだけなんです。もうひとつは、何がいいか悪いかの判断ができないんです。これをさせるのがこれからの教育だと思いますし、家庭も子どもから教えてもらわないかな。子どものほうがよっぽど先をいってると思ってますから、子どもから教えてもらうことって結構あるじゃないですか。そういうことの街づくりを、コンパクトシティだからこそすぐできる教育をやっていきたいと思っています。

衛藤教育委員

今度は市民の立場から言わせていただきますと、私はNHKの番組をよくみてるんですが、6時半から北九州の話題を中心にやっている番組が15分くらいあってるんですが、「中間市がでてこないんですよ。さみしいんですよ。中間市ではいろいろな事やってるんですが、なんで中間市はでないの。」というのが、なんとなく市民として疑問に感じるんですよ。だから、あの中に中間市ができれば、発信できるわけですから、市民としては、中間市のことが紹介されるとうれしいなと思います。

福田市長

ひとつ、中間市がでなくなったのは、犯罪が少なくなってるんですよ。グットニュースは結構最近でてるんです。出てるんですが、今までみてなかったんです。「でてたよ」というと、「え。みればよかった」という声も増えています。今こぞってどこの自治体もニュースにしようと思って、NHKに情報を出しています。誰もがやっていることを伝えても、オリジナルの中間市さすがだなというものを選んで伝えた方が長く取材してもら

えるんですよ。誰でもやってるものを、「うちもやってますよ」だと「あっそうですか」で終わってしまう。でも、こういうことをやり初めましたといったら、「ちょっと追いかけてください」と。それが今回の教育であったりするわけですよ。今まで、教育でもあまり目立たなかったんでしょ。それが、いきなり小学校で全国を抜いたなんて、「じゃー中学校は」という話ですね。「実はこういう取組をしているんだよ」って、そうやって追いかけるような、こちらから言わなくても、「取材させてください」と言われるような街にしていきたいと思っています。分かりました。

衛藤教育委員

要は市民として中間市の話題がみたいと。だから、私が知っている話題は、胸を張るような話題は少ないんですよ。この前、京築の方で英語暗唱大会をNHKが取材したんですね。中間市は相当前からやっているんですよ。どうして中間市は出ないの、と思うことがあるんですよ。悔しいですもんね。

福田市長

はい、分かりました。他にはございませんね。
それでは長時間にわたりありがとうございました。
本日の議事、これで終了いたしましたので事務局にお返しいたします。

佐伯教育部長

福田市長ありがとうございました。
これもちまして、令和元年度中間市総合教育会議を閉会いたします。
本日はみなさんありがとうございました。

[閉会時刻：11時30分]